

長谷川端蔵 『源氏物語』 能 円 筆 「紅梅」

玄 仲 筆 「夢の浮橋」

長谷川 端（文責）

村 駒 田 貴 子  
井 田 貴 子  
俊 貴 子  
司 貴 子

## 解題

### 一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』『源氏物語秘訣』各一冊の中の能円筆「紅梅」、玄仲筆「夢の浮橋」である。

「紅梅」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、上部下部に二群の草花を描いた下絵に「こうはい」と墨書きする。全丁数は十八丁、墨付十六丁、遊紙は前後各二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は二丁二十三字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「夢の浮橋」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央から上部に山の木々を配し、下部に細い線で川波描いた山水の景の下絵に、「夢のうき橋」と墨書きする。全丁数は二十二丁、墨付十九丁、遊紙前一丁、後二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は四丁二十五字、字高は十九糎。最終丁の末に「校异」と記す。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」<sup>(2)</sup>、玄陳筆「帚木」<sup>(3)</sup>、「関屋」<sup>(4)</sup>、玄的筆「空蝉」<sup>(5)</sup>、岡本主水筆「夕顔」<sup>(6)</sup>、「若紫」<sup>(7)</sup>、「賢木」<sup>(8)</sup>、「明石」<sup>(9)</sup>、「櫻標」<sup>(10)</sup>、「蓬生」<sup>(11)</sup>、「薄雲」<sup>(12)</sup>、「少女」<sup>(13)</sup>、「玉鬘」<sup>(14)</sup>、「橋姫」<sup>(15)</sup>、「手習」<sup>(16)</sup>、石井了俱筆「末摘花」<sup>(17)</sup>

「常夏」<sup>(18)</sup>、西山宗因筆「紅葉賀」<sup>(19)</sup>、「宿木」<sup>(20)</sup>、左馬助筆「花宴」<sup>(21)</sup>、東寺觀智院筆「葵」<sup>(22)</sup>、北左平次行生筆「花散里」<sup>(23)</sup>、大鳥居信岩筆「須磨」<sup>(24)</sup>、宗琢筆「絵合」<sup>(25)</sup>、玄仍息女筆「松風」<sup>(26)</sup>、伴与九郎紀念筆「朝顔」<sup>(27)</sup>、昌俣筆「初音」<sup>(28)</sup>、八幡田中殿筆「胡蝶」<sup>(29)</sup>、宗具筆「蛩」<sup>(30)</sup>、北畠殿筆「篝火」<sup>(31)</sup>、能舜筆「野分」<sup>(32)</sup>、水無瀬中将殿筆「藤袴」<sup>(33)</sup>は既に解題を付し翻刻した。

## 二、能円と玄仲の書写

『源氏物語筆者目録』には、「北野衆」と記す北野社に關係する三人の書写者がいる。能舜、能円、能通である。能舜は「野分」を翻刻した際に取り上げたが、本稿では残りの二人について触れておきたい。まず、今回翻刻した「紅梅」の書写者である能円を見てみたい。

能円については、『顯伝明名録』<sup>(34)</sup> 卷三に、

能円 北野宮司法橋（法眼）紹巴直弟

と記されており、紹巴の弟子だとわかる。能円が紹巴の弟子であった様子は、『時慶記』<sup>(35)</sup> 慶長五年（一六〇〇）九月二日の条にある、

二日 天晴、暁天大ニ雷電大雨（中略）紹巴へ三順所望 発句事申遣候処ニ能円來、談合シテ歸  
という記事からもわかる。また紹巴の嫡男、玄仍の使いとなっている記事も、同記の同年正月二十四日の条にある。

廿四日 天曇、夕ニ曇、（中略）能円來、玄仍使也、白藤ノ穂ヲ遣候、

これと同様、玄仍の使いとなっている記事は同年九月六日にも残っている。

そして、『顕伝明名録』にある「北野宮司」については、福井久蔵氏の、

梅林 能運（寛永十） 能円（寛文八八）

という記載や、『隔賞記 総索引』の「能円」の項に、

梅林、法橋、北野一臈預

と注記するように、北野社の社坊の一つ梅林家の流である。

そして、福井氏の「能円（寛文八八）」によると、生年は天正九年（一五八一）となる。

その連歌活動を見ると『連歌総目録』における能円の初出は、慶長三年（一五九八）一月二十日の百韻であり、年齢でいえば十八歳の時となる。そして、年代がわかる晩年の一座が、八十四歳の寛文四年（一六六四）四月十日である。

長きに亘る連歌師としての活動の中で、この「紅梅」を書写した寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）は、能円の年齢でいえば、四十七歳から四十九歳にあたる。

この「紅梅」書写より時代が下るが、鳳林承章の『隔賞記』には、いくつかの能円に関する記録が残っており、その中には、『源氏物語』に関する記述もある。例えば、寛永十五年（一六三八）七月二十六日の条には、

廿六日、早晨自万年、帰山。於北岳、能円講源氏物語、聴聞之。

という能円が源氏を講義したという記事がある。また、寛永二十一年（一六四四）正月十九日の条には、

午時能円・能花被来。能円源氏物語之講尺也。花散里卷之初也。聴聞之也。花散里濟、須磨卷少聴聞之也。

とあり、その源氏の講義は、「花散里」が終わり「須磨」に入ったと具体的な巻名も記して、進捗状況を述べて

いる。

能円による源氏講義<sup>43</sup>は、ここに引用した寛永十五年（一六三八）七月二十六日以降、二つ目の引用の寛永二十一年（一六四四）を経て、承応元年（一六五二）に「明石」至り、明暦二年（一六五六）に、再び「桐壺」を講ずるまでの記事がある。巻を追って「明石」迄の講義がなされて、その途中には「初音」「桐壺」も講じられている。この間、十九年に及び寛永十七年（一六四〇）六月二十日の条には、「未摘花」の書写をした記述も残っている。

このように「紅梅」の書写者の能円は、長年、鳳林承章に源氏講義をするほど『源氏物語』に造詣が深い、北野社の神官であり連歌師であった。

そして、次に「夢の浮橋」の書写者、玄仲について触れておきたい。

玄仲の外孫である伊藤仁斎の次男、伊藤梅宇著の『見聞談叢』<sup>44</sup>に玄仲の発句に触れた部分がある。

「けふや春雪を花とは都人」と云ふ句は玄仲の発句、死せる年の元日に雪降りければ、かくありと。

この句が詠まれた没年は、『紀年大成』<sup>45</sup>に「寛永十五戊寅 里村玄仲 二月三日六十一」とあり、また『古今書画 増補鑒定便覧』<sup>46</sup>上にも「寛永十五年二月三日歿、年六十一」と記されている。そのため、玄仲の生涯は、天正六年（一五七八）から寛永十五年（一六三八）二月三日までとわかる。

その玄仲は『顯伝明名録』<sup>47</sup>巻七には、

玄仍 連哥宗匠紹巴子号素（素イ）雪齋

玄仲 同紹巴二男号直衆齋

とあるように、父は紹巴で兄に玄仍がいる。その父紹巴の邸宅について、梅宇の『見聞談叢』には、

居宅下長者町堀河東へ入る南がわにあり。その家を子玄仲、孫玄祥、玄祥の子紹兆まで伝れり。玄仲の室は吉田易安と云つて江府の御医者のむすめ妙玄院と称す。吉田易安は京都角倉吉田甫菴の子なり。

という記載もあり、玄仲は父紹巴の家を相続したとわかる。また、角倉家の妙源（玄）院が妻であったと知られる。そして、『京都名家墳墓録』の「伊藤了室墓」には、

其左方に並び、了室の妻、里村氏の墓在り、表面に寿玄孺人里村氏之墓、左側に

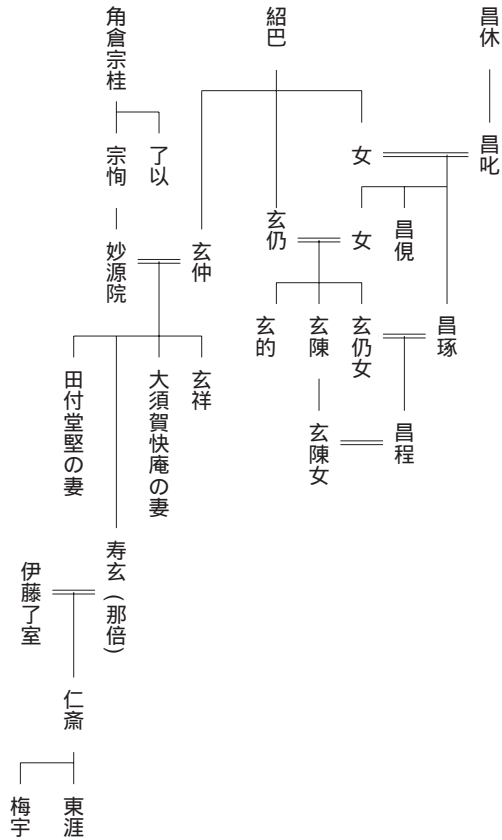
孺人諱耶倍、姓里村氏、生于京師、祖紹巴、考玄仲世善連歌、階法眼、妣妙源院吉田氏、宣徳院法印宗恂之女也、長而歸于伊藤了室府君、延宝元年癸丑七月十一日終、寿六十五、子男五人女二人、古学先生及其長子也。

宝永丁亥、孝孫長胤建

という玄仲の娘である耶倍の墓碑銘があり、父、玄仲や母、妙源（玄）院についても言及がなされている。この墓碑銘や『見聞談叢』、『顯伝明名録』等（註）によつて、玄仲の事跡を年譜と系図にすると次のようになる。

年号	歳	記事
天正 二年（一五七四）		昌琢出生。
六年（一五七八）	1	出生。
十六年（一五八八）	11	昌琢の弟、甥の昌倪出生。
十七年（一五八九）	12	一月四日、連歌会の執筆となる。
十九年（一五九一）	14	甥、玄陳出生。
文祿 二年（一五九三）	16	甥、玄的出生。

	三年 (一五九四)	17	十一月十五日、父、紹巴や兄、玄仍等と連歌会に出座。
慶長	七年 (一六〇二)	25	父、紹巴没。
	八年 (一六〇三)	26	二月十日、源氏講義を聴聞する。
	十年 (一六〇五)	28	十二月十日、西洞院時慶を源氏のことと訪問。
	十二年 (一六〇七)	30	嫡男、玄仍没。
	十四年 (一六〇九)	32	一月以降、法橋。次女、那倍出生。
	十五年 (一六一〇)	33	四月上旬、『万葉集宗祇抄』を書写。
	十九年 (一六一四)	37	同じく、『年中行事歌合』書写か。
寛永	二年 (一六二五)	48	七月中旬、『源氏物語』松風を書写。
	四年 (一六二七)	50	柳営連歌に参画。
	十年 (一六三三)	56	七月二十日、外孫、伊藤仁斎出生。
	十三年 (一六三六)	59	八月以降、法眼。
	十四年 (一六三七)	60	昌琢没。
	十五年 (一六三八)	61	二月五日、『昌琢一周忌追善百韻』が、現存最後の一座。
			二月三日、没。



この年譜や系図からわかるように、玄仲は紹巴の次男として誕生、京都の豪商角倉家から妻、妙源（玄）院を迎えた。そして、その子女に玄祥、医家の大須賀快庵の妻、伊藤了室の妻那倍、蒔絵師の田付常堅の妻がいる。

その足跡については、福井久蔵氏<sup>50)</sup>に、

玄仲も兄と共にその名聞えて各一家を成した。里村家系図には蕉翁と号したとある。また某書には直衆庵と称し、また父の号をついで臨江斎と言ったともある。寛永二年から御城連歌の第三を勤仕し、それから昌琢



と交互に宗匠となり、発句又は第三を勤め寛永十五年に至り、その年の二月三日六十一歳で没した。(中略) 屋敷を本所緑町に拝領し、その子玄祥その孫紹兆に至るまで幕府の連歌師であった。という説明がある。

ここで玄仲の『源氏物語』に関する足跡を掲げておけば、次のようになる。まず西洞院時慶の『時慶記』慶長八年(一六〇三)二月十日の条には、

一源氏講尺近衛殿へ参入、玄仍・玄仲・宗順等<sup>⑧</sup> 会候、御所へ再返申入

とあり、玄仲は兄玄仍や多くの連歌会で一座する宗順と共に近衛信尹の源氏講義に連なっている。また同記の慶長八年(一六〇三)十二月十日には、「玄仲来儀、源氏事申候」とあり『源氏事』で時慶を訪問している。

そして、長坂成行氏<sup>⑨</sup>が言及する、慶長十九年(一六一四)七月中旬に玄仲が書写した「松風」の巻が現存している。更に、源氏ではないが『玄仲抄』<sup>⑩</sup>(『伊勢物語聞書』)という、成立年代は不明の『伊勢物語』の注釈書も著したといわれる。

これらを踏まえ、玄仲が「夢の浮橋」を書写した寛永四年(一六二七)から六年(一六二九)の動静に触れておけば、北家の初代である兄の玄仍が没した後、北家の年長者として、当時の連歌界で南家の四歳年長である昌琢に継ぐ重鎮として、柳営連歌など多くの連歌会で活躍していた頃だといえる。この頃の玄仲が出席した連歌会については、後に掲げる表にまとめておいたが、昌琢を頭として里村一族が揃って出席する連歌会とは別に独自の一座が多いのは、玄仲は玄仲として確固たる地位を連歌界に築いていた状況を物語っている。その玄仲が巻末「夢の浮橋」の書写を担当したのは、五十歳から五十二歳の時である。

## 三、本文のミセケチ・補入等

ここではミセケチ、補入等に着目して、今回翻刻した「紅梅」「夢の浮橋」の二巻におけるその数を調べると、次のようになっている。参考のため、以前調査した「桐壺」から「野分」に「藤袴」「橋姫」「宿木」「手習」を加えた表も掲げた。

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
紅梅	能円	52	31	4	4	33	124
夢の浮橋	玄仲	4	10	4	3	21	42
桐壺	昌琢	2	7	0	1	0	57
帚木	玄陳	0	0	0	0	0	2
空蟬	玄的	0	1	0	0	0	1
夕顔	岡本主水	76	48	2	14	113	253
若紫	岡本主水	70	49	10	14	150	293
未摘花	了俱	2	0	1	0	0	3
紅葉賀	宗因	48	29	4	7	28	116
花宴	左馬助	7	3	1	10	2	23
葵	観智院	4	4	8	3	0	19

總計	朱点	合点	傍書	補入	三七ケ子	書写者	卷
76	21	4	9	24	18	能舜	野分
0	0	0	0	0	0	兼俊	藤袴
202	49	10	17	25	101	岡本主水	橋姫
53	0	0	12	19	22	宗因	宿木
356	143	18	11	64	120	岡本主水	手習

總計	朱点	合点	傍書	補入	三七ケ子	書写者	卷
196	55	15	2	34	90	岡本主水	薄雲
96	18	11	4	6	57	紀金	朝顔
247	60	13	5	35	134	岡本主水	少女
195	55	8	13	26	93	岡本主水	玉鬘
67	30	14	6	10	7	昌規	初音
110	27	4	9	17	53	八幡田中	胡蝶
148	38	1	24	49	36	宗具	螢
92	20	17	7	28	20	了俱	常夏
16	0	2	8	5	1	親頭	篝火

總計	朱点	合点	傍書	補入	三七ケ子	書写者	卷
235	59	21	6	55	94	岡本主水	賢木
10	4	1	1	2	2	行生	花散里
217	84	55	11	33	34	信岩	須磨
252	99	25	9	40	79	岡本主水	明石
147	64	5	6	17	55	岡本主水	濤標
124	14	6	5	28	71	岡本主水	蓬生
17	6	2	2	5	4	玄陳	閑屋
109	30	0	2	26	51	宗琢	絵合
8	0	0	4	0	4	玄仍息女	松風

今回翻刻した二巻について見ると、「夢の浮橋」の最終丁に「校异」と記されている。そのため「夢の浮橋」は校合が行なわれた結果の数値である。また、「紅梅」は、全丁数は「夢の浮橋」より少ないのに、ミセケチ、朱点等の総数は三倍以上である。この総数から「紅梅」も校合が行なわれているといえる。

今回の二巻を含め表全体を通して見ると、書写者によってミセケチ、朱点等の数に大きな違いがあると思われる。その理由は、校合の有無であり、筆功として多くの巻を請け負う、岡本主水が担当した巻は校合がなされているため、ミセケチ、朱点等の数が多いという結果が出ている。

このような大まかな結果は得られたが、ミセケチ、朱点等の調査を行なった巻は表でわかるように、全体の半数程である。そのため、やはり現時点では、表に見られる実数の認定に止めて、様々な見解、及び断案を下すのは、控えたいと思う。

#### 四、新善法寺・宗順・伊益・能通・桜井藤兵衛などの書写者

ここでは、まだ解題で取り上げていない「梅枝」の八幡久古・「横笛」の新善法寺・「鈴虫」の梨原宗順・「幻」の伊益・「匂宮」の能通・「東屋」の桜井藤兵衛・「浮舟」の智雄院秋閑の七人の書写者について、一括して触れておきたい。

まず、「梅枝」の書写者である八幡久古については、石清水八幡宮の神人かと思われるが、詳細は不明である。そして、その石清水八幡宮の宮司が「横笛」を書写した新善法寺である。周知のように新善法寺家は、「胡蝶」の書写者の八幡田中殿の田中家と同じく八幡宮の祠官家である。その新善法寺家の「横笛」が書写された寛永四

年（一六二七）から六年（一六二九）の当主は、『石清水八幡宮史』<sup>(54)</sup>「祠官家系図」に、

重清 新善法寺

実者他姓也、武家之子、以養子儀美之女子嫁相統前代未聞之儀也、（中略）天正廿年卯月十六日、社務職二補又

とある重清といえる。この注記によれば、血統による相続でなく武家の出身で新善法寺を継いだ人物だと記されている。そして、『連歌総目録』による連歌会への出座等も確認できない。そのため、石清水関係者であるためという以外、この書写に参加した理由等の詳細は不明である。

この新善法寺重清とは対照的に多くの連歌会への参加が認められるのが、『鈴虫』を書写した梨原宗順である。先ず『顕伝明名録』<sup>(55)</sup>巻九を掲げれば、

宗順 紹巴門弟連哥師内侍原

と記されている。『源氏物語筆者目録』では「梨原」とする宗順の姓を、ここでは「内侍原」と記す。この「内侍原」の用例は、『時慶記』<sup>(56)</sup>慶長九年（一六〇四）七月一日の条にもある。

一日 天晴、早朝ヨリ玄仍へ興行連哥二出座、嶋津家中一・図書頭・三上越前守・内侍原宗順・カコ勘左衛門。立於・能閑・昌琢・玄仲以上十一人也（下略）

これは、玄仍興行の連歌会に宗順が一座した記事である。そして、『鹿苑日録』<sup>(57)</sup>巻六十四、寛永三年（一六二六）十一月九日の条にも、

九日、早朝赴内侍原宗順、漢和之会。

というように記されている。宗順の姓について「梨原」「内侍原」の二つを掲げたが、このほかに安樂庵策伝の

『策伝和尚送答控』<sup>(65)</sup>では、「奈子原」と表記している。

奈子原宗順へ

伝

あはねとも馴しをしたふこころをは紅葉のいろに見せも(て)ヲ消シテ(こ)そすれ  
返し 宗順

吹をくる風の紅葉の色よりも人のこころのふかきを見

この「内侍原」「奈子原」という姓から、鈴木棠三氏<sup>(66)</sup>は宗順の出身について大和、近江の可能性に言及している。その宗順の生没年は未詳であるが、『連歌総目録』によると連歌会への出座の最も早いのが、慶長二年(一五九七)十月二十七日の玄仍も同座している連歌会である。そして、一番遅いのが寛永六年(一六二九)一月十七日の小堀遠州と同座の連歌会である。この間、多くの連歌会で連衆となっている。更に、寛永六年(一六二九)三月には、八条宮を昌俔、玄陳と見舞うという記事が『時慶記』<sup>(67)</sup>に見られる。このような足跡と『顕伝明名録』の「紹巴門弟」という記載から、宗順の年齢は、紹巴の次の世代である昌琢、玄仲に近いと考えられる。

宗順は紹巴の門人であるため、この章の最後に掲げる書写年代頃の連歌会の表でもわかるが、昌琢や昌俔、玄陳、玄的といった里村一族との一座が多い。そして、この里村一門の連歌師という宗順の位置が、昌琢、玄仲といった里村一族が主幹をなすこの書写に参加し、「鈴虫」を担当した理由であるといえる。

その宗順について、『鹿苑日録』<sup>(68)</sup> 卷五十三、元和元年(一六一五)三月二十日の条には、その人物が偲ばれる記事もある。

廿日、自早朝赴宗順、漢和会席、私宅綺麗、路地絶点塵。樹木布繁陰、誠市中隠也。

相国寺鹿苑院主が、趣のある宗順の私邸に赴いたという記事である。この記載から宗順は閑静な邸宅を市中に所

有する連歌師として、当時の京都の文化人の一人だったといえる。

その宗順と同様、京都の文化人であったのが、「幻」を書写した伊益である。『顕伝明名録』<sup>62</sup> 卷二には、

伊益 也足軒門弟 京住人

とある。「也足軒」とは、中院通勝の号であり、伊益は通勝の門人で京都在住であるとわかる。その伊益が通勝の門人であった様子は、『泰重卿記』<sup>63</sup> 寛永六年（一六二九）九月十三日の条に、中院家での和歌会に伊益の名前が見える点からも窺える。

十三日、乙未、晴、如約束飯後中院へ和哥会父子同道参候、水無瀬前黄門・北畠相公・七条侍従・予父子・亭主父子・伊益、以上八人也、当座以上題十五首也、秉燭時分清書読上有之也、酒宴以後各罷帰候。

この歌会には、伊益のほか、この『源氏物語』揃で「篝火」を書写した「北畠相公」の親頭や、「水無瀬前黄門」の「藤袴」を書写した水無瀬兼俊の父、氏成が出詠している。北畠親頭は、北畠家を再興して、その姓を名乗っているが中院通勝の次男であり、実家の歌会への参加である。尚、ここにある記主である「予父子」とは、藤原泰重、泰広で、歌会の「亭主父子」は、中院通村、通純を指す。通村は伊益の師、通勝の嗣子である。

また同記の同年閏二月八日にも、

八日、甲子、雨天、晚中院父子・左内・予盛・伊益等也、飯後香三反有之也、夜半過也、

とあるように、中院父子と伊益が香遊び<sup>64</sup>に同席している記述もある。

歌会や香遊びと共に伊益は連歌会にも出座している。『連歌総目録』によると、九回の連歌会への出座が見られる。初出は元和六年（一六二〇）五月十六日で、玄仲とも同座している。そして、年代がわかる最も遅いのが、この章の末尾に掲げる書写年代頃の連歌会の表にもある寛永五年（一六二八）七月二十三日である。このように

元和、寛永期に活躍が見られる伊益であるが、生没年は未詳である。

その伊益が「幻」の書写者として抜擢されたのは、連歌会に於ける里村家の人々との繋がりと、先の『泰重卿記』の記事が伝える、中院通勝の門人として、堂上の人達とも交流する京都の文化人であったからである。

次に触れるのは、北野衆の能通である。能通については、先ず福井氏の、

西久松 能札(天和八) 能通(寛永六) 能通(寛永廿一) 能通(延宝七)

という系譜を掲げておきたい。最初に記される能札の「天和八」は、存在しない年号であり疑問が残るが、襲名による三代に亘る「能通」を掲げる。

この『源氏物語』揃の書写年代は寛永四年(一六二七)から六年(一六二九)であり、そうすると「匂宮」を書写した能通は、一応、初代の「能通(寛永六)」だと考えられるが、襲名した年月が不明であるため厳密には、二代目や三代目の可能性も残る。

そして、能通の連歌活動を『連歌総目録』から抜き出せば、九つの連歌会への出座が見られる。

慶長十四年(一六〇九) 九月十六日 昌琢・慶純・宗隆・慶・甫・孝子・能札・昌俔・紹由・玄陳・能舜・

宗順・能通

慶長十六年(一六一一) 十一月十六日 道与・玄仲・昌琢・正清・能札・昌俔・紹知・紹由・了俱・能舜・

莫滋・能通

元和二年(一六一六) 四月十七日 利宗・慶純・能札・紹由・宗順・了俱・宗億・能通・仙巖・能意

元和三年(一六一七) 二月 七日 吉康・内上・惣代・能柏・紹阿・能作・宗因・久世・能三・能円・

能通・能頓・能範・能琢・岩夜叉



元和 五年（一六一九） 八月 十日 至鎮・能札・昌琢・禪高・昌倪・玄陳・慶純・玄的・宗順・能通・

政直・能派

元和 八年（一六二二） 四月 直純・内上・蔵人・兵衛・惣代・禅意・禅昌・禅知・意運・兼益・

紹味・道更・能三・能円・能通・能賀・能故・能吉

元和 九年（一六二三） 四月 十日 昌琢・玄琢・玄仲・禅昌・昌倪・禅意・玄陳・慶純・素閑・宗順・

能通・昌佐

寛永 二年（一六二五） 六月 十日 色（八条宮）・長盛・慶純・忠定・宗順・宗乾・与孝・正重・切臨・

能通・不屑・長信・城与・正次・勝政・正種・直友・宗延

寛永 五年（一六二八） 十一月 六日 常繼・昌琢・昌倪・常安・友務・友繼・景益・宗於・住康・能泉・

能通・心利・能海

網かけ部分は、この『源氏物語』揃の題衾を書いた八条宮と書写者である。概観して昌琢、昌倪といった里村家の人々や名前に「能」という字が付く北野衆との同座が多いとわかる。

その能通の年齢は未詳であるが、慶長年間の『時慶記』<sup>66</sup>には、  
十四年（一六〇九）九月十六日の『連歌会』での句数は「一」であり、  
の連歌会と同年の慶長

十六日、天曇（中略）一慶純興行依兼約陣義等之事不見之、無念く、可尋之、早々出座、杉原十帖遣候、

発句昌琢、脇亭主、第三賀古豊前守、四句目予、五句目阿野、其外八昌倪・浅井左馬助孝子・宗順・紹由・

能礼・能舜、執筆能通、未刻二滴、棊アリ、手本共一覽ノ及夜半前テ帰、御番時直勤。

「執筆能通」と記されている。「執筆」は「連歌に精通している能筆の若者が理想」という『連歌辞典』<sup>67</sup>の説明が

あり、同年の連歌会に於ける一という句数を合わせ考えれば、慶長十四年（一六〇九）当時の能通の年齢が若かったといえる。昌琢やその弟の昌俔が、最初に出座したのが十二歳であり、それにならい慶長十四年（一六〇九）に能通が十二歳で執筆であったとすれば、この「句宮」を書写した寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）は、三十歳から三十二歳になる。

その能通によるこの書写への参加は、連歌に関係が深い北野社の関係者として、連歌会での里村家の人々との繋がりにあるのはいうまでもない。

次に九州の連歌関係者だと考えられる桜井藤兵衛と智雄院秋閑を取り上げたい。

桜井藤兵衛を『連歌総目録』で調べると、ただ一つ次の独吟による百韻がある。

元和三年（一六一七）一月 何路百韻 発句 春はけふ花を待日のはしめ哉 正慶百

この注記に「梁川藩桜井藤兵衛」とあり、そのため「正慶」を『連歌総目録』で見ると、年月日が明確な連歌会への出座としては、次の三つが注目される。

慶長十三年（一六〇八）一月 正慶独吟千句 四十二年祈祷 跋正慶

元和五年（一六一九）八月十九日。山何百韻 勢州川村彦太夫

発句 百草の花野は八十のちまた哉

昌琢十三・正慶八・玄仲二・昌俔十一・玄陳十・宗億八・玄的十・甚澄八・以省八・素閑七・貞重七・宣

滋七・昌佐一

元和五年（一六一九）九月二十一日。初何百韻

発句 菊紅葉おれはつりの衫かな

昌琢十三・応昌九・玄仲十二・未云八・昌倪十・玄陳九・友勢九・玄的九・以省八・円政七・素

閑

八・正慶七・昌佐一

は、慶長十三年（一六〇八）に正慶が四十二歳であったと思われる千句である。そして、では、里村一族と同座しているので、この書写の主幹である里村家との繋がりが確認できる。

前に引用した桜井藤兵衛が正慶であるという注記には「梁川藩」とも記されていた。この注記は「元和三年（一六一七）一月」の独吟に付されており、この当時の柳川藩は、三河国岡崎から田中吉政が入封していた。柳川藩は、豊臣秀吉の九州平定後、立花宗茂によって成立したが、関ヶ原の合戦で立花氏が西軍に味方したため改易となり、田中氏が入ったが元和六年（一六二〇）に、その田中氏は二代で断絶し、立花氏の再入封となるという経緯を持つ。その立花氏の家臣の一人が桜井氏であった。

『立花家旧臣文書』<sup>68</sup>の中には、元龜二年（一五七二）四月二十二日の日付が残るキリシタン大名として知られる大友宗麟が、桜井藤兵衛に筑前筵田郡を与えた、という内容の文書がある。この書簡の宛名には「桜井藤兵衛入道殿」とあり、先の「正慶独吟千句」で慶長十三年（一六〇八）に四十二歳だとすれば、この書簡を受け取った時、五歳となる。そうすると、「入道殿」という呼称からも別人であり、宗麟からの書状は祖父、或いは父にもたらされ、そこには「藤兵衛」の襲名があったかと思われる。

先の「正慶独吟千句」の記述によって、慶長十三年（一六〇八）の桜井藤兵衛の年齢を四十二歳とすれば、この「東屋」を書写した寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）は、六十一歳から六十三歳となる。そして、

書写への参加は、里村家の人々との連歌による繋がりによるといえる。

最後に智雄院秋閑について触れておきたい。秋閑については「閑」が「潤」となっているが、『顯伝明名録』<sup>(69)</sup> 卷三に、

秋潤 肥後国熊本智雄院日収

という記載があり、「日収」という僧かと思われる。この「日収」については『日本人名大辞典』<sup>(70)</sup> に、

日収（1578～1650）江戸時代前期の僧。天正6年生まれ。日蓮宗。京都松ヶ崎檀林でまなび、のち下総飯高（千葉県）の檀林で日遠に師事。元和6年肥後（熊本県）常光寺2世となる。書画詩文をよくした。慶安3年10月10日死去。73歳。能登（石川県）出身。字は秋潤。号は智雄院。

という解説がある。ここに連歌会などについて言及がないように、『連歌総目録』でも「智雄院秋閑」は見られない。そのため、この日収を「浮舟」の書写者「智雄院秋閑」とするのは、なお慎重に考える必要があると思われる。

仮に日収として『日本人名大辞典』のいう、天正六年（一五七八）から慶安三年（一六五〇）という七十三年の生涯であれば、「浮舟」の書写年代である寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）は、五十歳から五十二歳に相当する。そして、この書写への参加の契機は、九州の連歌関係者を通してではないかと推察される。

ここまで本稿で取り上げた書写者達の連歌活動を、『連歌総目録』から抽出して表にしておきたい。その期間は、書写が行なわれた寛永四年（一六二七）から六年（一六二九）を含む、寛永元年（一六二四）から六年（一六二九）迄である。この期間に連歌活動がある書写者は、玄仲、宗順、伊益、能通、能円の五人である。その連歌活動を年代順に並べ、この『源氏物語』揃の書写者で連衆となっている人物に丸印を付した。

年	月日	八条	昌琢	昌俣	玄陳	玄的	玄仲	了俱	宗因	行生	宗貞	宗順	伊益	能舜	能通	能円		
寛永元年(一六二四)	一月 三日																宗琢同座	
	一月 六日																	
	一月 二十一日																	
	七月 十一日																	
	十月 十八日																	
	十二月 十八日																	
二年(一六二五)	一月 二十一日																玄仍十七回忌	
	三月 三日																	
	四月 三日																	
	四月 晦日																	
	五月 十日																	
	八月 十四日																	
	八月 二十日																	
	十月 二十二日																	
	一月 三日																	
	三年(一六二六)																	

この表を見ると、昌琢、昌俣、玄陳、玄的の里村一族が揃って出座する連歌会が多いとわかる。その一族の中で玄仲のみは、この一族が揃って出座する連歌会の連衆となっていないのは、三回だけであり、独自の活動が顕著である。これに対して、宗順は、昌琢を中心として一族が揃う連歌会への出座が殆どであり、紹巴の門人という立場を如実に示している。また、伊益は、中院通勝の門人であるためか、宗順の二十八回の出座に比べても五回と非常に少ない。それより更に少ないのが、北野社の関係者である能円の三回、能通の二回である。



今まで翻刻した巻の書写者については、その都度、取り上げてきたが、ここでは、その結果も踏まえて、全体を繋いで書写者と担当した巻についての考えを述べて、一応のまとめとしておきたい。  
 先ず、書陵部蔵の『源氏物語』を分量の少ない巻の順番に並べて、この『源氏物語』揃の書写者を付したのが、次の表である。

五、全書写者と担当巻について

									六月 (二六二九)	一月 十七日	十一月 六日	十月 二十八日	八月 十日	七月 二十三日	五月 二十日
	七月 十日	四月 十三日	閏二月 二日	二月 二十二日	一月 二十九日	一月 二十七日	一月 二十五日	一月 二十日							
12															
37															
30															
28															
22															
24															
8															
7															
9															
2															
28															
5															
1															
2															
3															
				加藤正方向摩 江戸	加藤正方向摩 江戸			江戸	小堀遠江守同座						

巻	書写者
篝火	北畠殿
花散里	行生
閑屋	玄陳
空蟬	玄的
花宴	左馬助
紅梅	能円
匂宮	能通
藤袴	水無瀬中将殿
初音	昌俔
鈴虫	宗順
野分	能舜
夢の浮橋	玄仲
横笛	新善法寺
梅枝	八幡久古
早蕨	宗具
幻	伊益
絵合	宗琢
堂	宗具
御法	昌俔
朝顔	伴与九郎紀金
胡蝶	八幡田中殿
松風	玄仍息女
常夏	石井了俱
藤裏葉	玄陳
紅葉賀	宗因
桐壺	昌琢
蓬生	岡本主水
行幸	岡本主水
薄雲	岡本主水
未摘花	石井了俱
漣標	岡本主水
真木柱	岡本主水
椎本	岡本主水
須磨	大鳥井信岩
橘姫	岡本主水
竹河	岡本主水
明石	岡本主水
柏木	岡本主水
玉鬘	岡本主水
葵	東寺觀智院
少女	岡本主水
若紫	岡本主水
夕顔	岡本主水
帚木	玄陳
賢木	岡本主水
蜻蛉	岡本主水
東屋	桜井藤兵衛
浮舟	智雄院秋閑
手習	岡本主水
夕霧	岡本主水
宿木	宗因
総角	岡本主水
若菜上	岡本主水
若菜下	岡本主水

この表を見ると、明らかに各巻の長さを計量して、その結果に基づいて、長い巻を岡本主水が担当するという原則があると思われる。主水は「筆功」という書写の専門家であり、これは当然ともいえる。その一方で、この処置で他の書写者が書写作業に費やす負担は軽減されるという見方もできる。

そうすると、表の下方の長巻に岡本主水が連続する中に、石井了俱、玄陳、桜井藤兵衛、智雄院秋閑、宗因が入っているのは、後にも記すが、例えば、玄陳は里村北家の嫡流として「桐壺」に次ぐ「帚木」の書写者として特に抜擢された等、そこには何か理由があると考えられる。その理由については、これ以降、通常の巻の順番に書写者と担当巻の関係を考えて行く際に適宜、触れたいと思う。

巻頭「桐壺」から見て行けば、「桐壺」は里村南家の当主で連歌界の大宗匠であつた昌琢が書写している。そして、それと対応する巻末「夢の浮橋」は、本来は北家の当主が相応しいのであるが、昌琢と同世代となる北家の当主の玄仍は故人であり、その弟の玄仲が担当している。これは、巻の中で最も重要な巻頭、巻末に南北両家の年長者を据えたという処置である。



そして、昌琢から見れば次の世代に当たり、甥でもある北家の嫡流を継いでいる玄陳を、「桐壺」に続く二つ目の「帚木」に当てて、「閨屋」「藤裏葉」という三巻の書写者としている。先の表でもわかるが、複数の巻を担当する人物は少なく、玄陳の三巻は最も多く、この点からも玄陳が主要な書写者だといえる。玄陳の「帚木」に続く「空蟬」の書写者が玄陳の弟の玄的である。

ここまで見て来た割り振りを見れば、この書写の主幹は昌琢を中心とした里村家であるのは明白である。

そこで次に、里村一族の担当巻とその人物の経歴等をまとめておきたい。年齢は書写が行なわれた寛永四年（二六二七）から六年（二六二九）の年齢を掲げた。

桐壺 昌琢 里村南家の当主・五十四〜五十六歳。

帚木 玄陳 里村北家の当主・「閨屋」「藤裏葉」も担当・三十七〜三十九歳。

空蟬 玄的 里村北家・玄陳の弟・三十五〜三十七歳。

松風 玄仍息女 昌琢の妻・玄陳の妹・玄的の姉妹。三十歳代が。

初音 昌倪 里村南家・昌琢の弟・「御法」も担当・四十〜四十二歳。

夢の浮橋 玄仲 里村北家・玄陳の叔父・五十歳〜五十二歳。

この中で、先に触れなかった玄仍息女、昌倪について述べれば、玄仍息女の「松風」は、表の岡本主水による書写の長巻を除外すれば分量の多い巻である。表で、この「松風」から岡本主水が最初に登場する「蓬生」に至る巻を見ると、里村一族と一門の書写となっている。これを見ると、他の書写者の書写作業の負担を考慮して、里村一族である玄仍息女が、岡本主水の担当以外では比較的分量のある巻を受け持ったという一面が窺える。

そして、昌倪については、「初音」という新年に読まれ、調度品の題材ともなる祝祭色の濃い巻の書写者であ

り、もう一つ「御法」も担当しているため、昌倪も書写者として重要な位置にあったといえる。

引き続き、前の里村一族と同様、岡本主水の担当巻は除外して、巻の順序に従い担当巻と書写者の経歴等を列記しておけば、次のようになる。年齢も先の里村一族の場合と同じである。

末摘花 石井了俱 「常夏」も担当・昌叱の門人・仙台藩の連歌師・伊達政宗と関係あり。

紅葉賀 西山宗因 「宿木」も担当・昌琢の門人・加藤正方家臣・二十三歳〜二十五歳。

花宴 左馬助 賀茂筆功。

葵 観智院 十一世栄禅・水無瀬親具の実子・中院道村の猶子・二十歳〜二十二歳。

花散里 北左平次行生 昌琢の門人・加藤肥後守忠広家臣・寛永四年没・二十歳代か。

須磨 大鳥井信岩 太宰府天満宮別当・五十六歳〜五十八歳・黒田如水と関係あり。

絵合 宗琢 玄仲に近い人物・細川忠隆と関係あり。

朝顔 伴与九郎紀金 石清水八幡宮の神人・五十歳代か。

胡蝶 八幡田中殿 田中敬清・石清水八幡宮の別当家・二十七歳〜二十九歳。

蛸 宗員 「早蕨」も担当・奈良の連歌関係者。

篝火 北畠殿 親顕・中院通勝の次男・道村の実弟・北畠家再興・二十五歳〜二十七歳。

野分 能舜 北野衆（上大路家）・六十歳代か。

藤袴 水無瀬中将殿 兼俊・氏成の嫡男・三十五歳〜三十七歳。

真木柱 八幡久古 石清水八幡宮の神人か。

横笛 新善法寺 石清水八幡宮の別当家・新善法寺重清。

鈴虫 梨原宗順

紹巴の門人。

幻 伊益 中院通勝の門人。

匂宮 能通 北野衆（西久松家）。

紅梅 能円 北野衆（梅林家）・紹巴弟子・四十七歳〜四十九歳。

東屋 桜井藤兵衛 桜井正慶・柳川藩・立花宗茂の家臣・六十一歳〜六十三歳。

浮舟 智雄院秋閑 日収・肥後常光寺二世・五十歳〜五十二歳。

里村一族で「空蝉」までの三巻を担当した後、「末摘花」を石井了俱、「紅葉賀」を西山宗因が書写している。この二人は、了俱がもう一つ「常夏」を、宗因が「宿木」を担当するこれも主要な書写者である。この二人に「花散里」の北左平次行生を加えて、里村一門の書写者が一族に続いて配されているのである。

「花宴」の左馬助は岡本主水と同じ「賀茂筆功」である。筆功とはいえ長巻ではないこの一巻のみの書写者であり、岡本主水の関係者として、何らかの事情で加えられたかと推察される。

長巻の「葵」「須磨」を書写した観智院と大鳥井信岩は堂上の出身者と大名にも準ずるといわれた太宰府天満宮別当である。その二人が長巻の書写者であるというのは、これも何か特別な事情が窺える。そして、玄仲と繋がりのある宗琢の「絵合」を経て、石清水関係の書写者の最初として「朝顔」の伴与九郎紀金が登場する。この紀金を含め石清水八幡宮の関係者が四人抜擢されているのは、この書写の一つの特徴といえる。

比較的短い巻の多い玉鬘十帖に入り、先に述べた昌俣の「初音」という晴れの巻がある。それと対をなすのが、「胡蝶」で「田中殿」と敬称で記されている石清水八幡宮の別当家、田中敬清が書写している。続く「蛩」を担当したのが紹巴ゆかりの奈良の連歌関係者、宗具である。里村家の人々との連歌会での同座も多く、その親密な

関係によってもう一卷「早蕨」も担当する。この宗具も主要な書写者といえる。

最も短い「篝火」は、「北畠殿」と敬称が付いている中院通勝の次男で、北畠家を再興した親類である。そして、北野社関係の書写者の最初である「野分」の能舜を挟んで、「藤袴」は、「水無瀬中将殿」とまた敬称で呼ばれる水無瀬兼俊の書写者である。「殿」という敬称で呼ばれるのは田中敬清、北畠親頭、水無瀬兼俊の三人であり、その中の田中敬清と北畠親頭の名前は、『泰重卿記』<sup>22</sup> 第二、寛永元年（一六二四）九月十四日の条にも見られる。

（前略）十三日和哥会始也、北畠・白川侍従・倉橋・田中・伊益・雄長丸・予、以上七人也、兼日月照菊・寄月恋、当座十五首也。

また『同記』第二、寛永元年（一六二四）十一月九日の条にも、

九日、庚申、時々雨降、予月次和哥会、人数雄長丸・北畠羽林・小倉・倉橋・（八幡）田中・伊益・予・又右衛門、此人数也、懐紙三首、時雨雲・橋上霜・遠村煙・当座十首也、予寄橋恋也、初夜時分中院御出、及深更御帰宅也。

という記事があり、二人が共に歌会に出座している様子がわかる。この二つ記事に名前が出ている「伊益」は、この後の「幻」の書写者でもある。また、先に伊益を取り上げた時に引用した『泰重卿記』には、「藤袴」の書写者水無瀬兼俊の父、氏成が和歌会で北畠親頭や伊益と共に詠歌したとあり、「殿」という敬称で呼ばれる田中敬清、北畠親頭、水無瀬兼俊の三人や伊益は旧知の間柄であつたいえる。つまり、『泰重卿記』の歌会に参会している人々が書写者となっているのである。

そして、ここでまた石清水関係者である八幡久古の「真木柱」、新善法寺の「横笛」があり、続いて紹巴の門人、梨原宗順の「鈴虫」、中院通勝の門人で、『泰重卿記』に、堂上の書写者とも交流が見られた伊益の「幻」が

来る。宗順と伊益は、当時の京都の文化人である。

宇治十帖への繋ぎの巻である「匂宮」と「紅梅」は、北野社の能通と能円が担当している。そして、宇治十帖の長巻三つを九州にゆかりのある人物が書写している。柳川藩の桜井藤兵衛が「東屋」を書写して、肥後常光寺二世である智雄院秋閑（日収）が「浮舟」を受け持ち、八代城主の加藤家に仕えた宗因に「宿木」が割り振られている。

以上、岡本主水を除く全ての書写者と担当巻を繋げて、全体を通して見てきた。その書写者を分類すれば、

里村一族、里村一門とその関係者

堂上家（北畠家、水無瀬家、中院家）の関係者

石清水八幡宮の関係者

北野天満宮の関係者

九州にゆかりのある人々

筆功（書写の専門家）

の六つに分類できる。その構成を簡潔にまとめれば、この書写は里村一族が主幹であり、それを一門が補完して、連歌を通して交流のある堂上家の人々の参画も得て、石清水社、北野社の関係者と九州にゆかりのある人々の協力によってなされたといえる。そして、長巻は賀茂筆功の岡本主水が担い、更に、八条宮智仁親王の手による題簽という箔づけを得て、この『源氏物語』揃は完成をみたのである。

## 六、結語

洛北金閣寺の住持鳳林承章が書いた『隔賞記』<sup>73</sup> 五 寛永二十年（二六四三）十一月十一日の条には、『源氏物語』に関する記述がある。

十一日、（中略）不動振舞前、花坊被来。自般舟院、言伝并源氏物語書写被相頼、鳥子紙六冊被相届也。東福松蔭之筆一枚、内々依約束、今日自般舟院、被惠之也。即花坊被相届也。

後水尾天皇にも関係がある般舟院<sup>74</sup>より、鳥子紙や筆を添えて『源氏物語』の書写依頼があつたと記されている。その書写については、少し年月が経過した正保二年（一六四五）二月六日の『同記』の中にも記事が見られる。

六日、到鹿苑院、勤半斎也。招彦公、斎相伴。斎了、赴般舟院也。自般舟、被頼、源氏物語之筆者之談合故也。金光寺・明王院依被居般舟院、而打談。連歌十句斗有之。夕滄振舞、喫濃茶、而及黄昏也。

記主の承章が金閣寺から般舟院に出掛けて、その般舟院の依頼による『源氏物語』の書写者を選考し、その後、連歌をした午後の様子が記されている。源氏に関していえば、前の記事にあつた依頼から一年以上が経過しているのに、実際の書写作業には掛かっていない様子がわかる。

この記事に見られる依頼や書写者の選考は、この『源氏物語』揃の場合にも当然、行なわれたといえる。例えば、『隔賞記』にある般舟院に相当する依頼した人物は、当然いたはずであるが、不明であり謎として残っている。先に触れた書写者の中に、この依頼主につながる人物が存在する可能性もあるが、特定できなかった。この問題を含め、細部としては書写者の出自など未解決の点もあり、興味は尽きないのである。

寛永期に作られた黒漆塗り菱紋の外箱(76)に入る徳川家、松平家ゆかりのこの『源氏物語』揃は、江戸初期の『源氏物語』本文を如実に示すとともに、当時の社会や文化を構想するのにも、有益な書物である。そして、それは、尚、様々な方面からの調査、考察、探究によって、西の桂離宮、修学院離宮、東の日光東照宮に代表される寛永文化と、その社会を今日に髣髴とさせる多くの可能性を秘めている逸品であるといえるのである。

## 翻刻凡例

- 一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
- 一、和歌は改行をし、二字下げとした。
- 一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
- 一、本文の傍書は原本通りとした。
- 一、補入記号がある場合は該当箇所「」を付し、補入文字は右に記した。
- 一、漢字の踊字「く」は、そのままとした。
- 一、本文の朱点は「・」で示した。



## (111)はこ)

そのころ按察大納言ときこゆるはこちしの  
 おとゝの二郎なりけりうせ給にし衛門督の  
 さしつきにわらはよりらうくしう花やかなる  
 こゝろはへものし給し人にてなりのほり給とし  
 月にそへてまいていとよにあるかひありあら  
 まほしうもてなし御おほえいとやん事なかり  
 けり・北の方ふたりものし給しをもとよりのは  
 なく成給ひて今ものし給は後のおほき大臣  
 の御むすめまきはしらはなれかたくし給ひし  
 君を式部卿宮にてこ兵部卿のみこにあ  
 はせたてまつり給へりしをみこうせ給ひて後  
 しのひつゝかよひ給しかととし月ふれはえさし  
 もはゝかり給はぬなめり・みこは北の方の御  
 はらにも二人のみそおはしければさうくして

1才

神仏にいのりていまの 是らにそおとこきみひ  
 とりまつけ給へるこ宮の御かたに女きみひと  
 所おはすへたてわかすいづれをもおなしこと  
 おもひ聞えかはし 給へるををのく御かたの人な  
 とはうるはしうもあらぬ心はへ打ましりなま  
 くねくしき事もいてくるときくあれと

1ウ

きのかたいとはれくしくいまめきたる人にて  
 つみなくとりなしわか御かたさまにくるしかるへ  
 き事をもなたらかにきくなしおもひなをし  
 給へは聞にくからてめやすかりけり・きみたち  
 おなしほとにすきくおとなひ給ぬれば  
 御もなときせたてまつり給ふ・七けんのしん  
 てんひろくおほきにつくりて南おもてに  
 大納言のよおほいきみにしに中の君ひん  
 かしにみやの御かたとすませたてまつり給へり  
 おほかたにうちおもふほとはちみやの

2オ

おはせぬ心くるしきやうなれとこなたかなた  
 の御たからものおほくなくしてうち／＼のきし  
 きありさまなとこゝろにくゝけたかくなとし  
 もてなし<sup>て</sup>けはひあらまほしくおはす・れいの<sup>かく</sup>  
 かしつきたまふ聞えありてつき／＼にした  
 かひつゝきえ給<sup>たま</sup>ふ人おほくうち春宮より  
 御けしきあれは内には中宮おはしますいか  
 はかりの人かほかの御けはひにならひ聞えん  
 さりとておもひおとりひけせんもかひなかるへし  
 春宮には右。大臣殿の女御ならふ人なげにて  
 さぶらひ給ふはきしるひにくれとさの  
 みいひてやは人にまさらんとおもふ女こをみや  
 つかへにおもひたえてはなにのほいかはあらんと  
 おほしたちてまいらせたてまつり給ふ十七八  
 のほとにてうつくしうにほおほかる心ち  
 し給へり・中のきみもうちすかひてあてに  
 なまめかしうすみたるさまはまさりてをか

## 2ウ

しうおはずめはたゝ人にてはあたらしく  
 みせまつき御さまを兵部卿のみやのさも  
 おほしたらはなとおほしたる・この御わかきみ  
 をうちにてなと見つけ給ふときはめしま<sup>と</sup>  
 はしたはふれかたきにし給ふこゝろはへあり  
 ておくをしはからるゝまみひたいつきなり  
 せうとを見てのみはえやましと大納言に  
 申せよ<sup>な</sup>との給<sup>ひ</sup>ふかくるをさなるときこゆれ  
 はうちゑみていとかがひあるとおほしたり人に  
 おとらんみやつかへよりはこのみやにこそはよろ  
 しからんとおもふ女こは見せたてまつらまほし  
 けれこゝろ。ゆくにまかせてかしつき<sup>たて</sup>まつらん  
 にいのちのひぬへきみやの御さまなりとの給  
 なからまつ春宮の御事をいそぎ給<sup>ひ</sup>て  
 かすかの神の御ことはりもわかよにやもし出き  
 てこおとゝ院の女御の御ことをむねいたくお

## 3オ

## 3ウ

ほしてやみにしなくさめのこと。心あらなんと  
 こゝろのうちにいのりてまいらせたてまつりた  
 まふついとゞきめき給ふよひにし人々聞ゆ・  
 かゝる御ましらひのなれ給はぬほとにはかゞし  
 き御うしろみなくてはいかゞとてきたの方ぞ  
 そひてさぶらひ給はまことにかきりもなぐ  
 おもひかしつきうしろみ聞え給ふ・とのはつれく  
 なるこゝちしてにしの御かたはひとつにならひ  
 給ていとさうくしくなめ給ふひんかしの  
 ひめきみもつとくしくかたみにもてなし  
 給はてよるくはひと所に御とのこもりよる  
 つの御事ならひはかなき御あそびわざをも  
 こなたをしのやうにおもひ聞えてそ誰も  
 ならひ給あそひける・物はちをよのつねならずし  
 給ひては北の方にたにさやかにあさく  
 さしむかひたてまつり給はすかたはなるまで  
 もてなし給ふ物からこゝろはへけはひのむもれ

## 4才

たるさまならずあひ行つき給へることは人  
 よりすぐれ給へり・かくうちまいりやなにやと  
 わかかたままをのみおもひそくやうなるも心  
 くるしなとおほしてさるへからんさまにおほし  
 きためての給へおなしことゞこそはつかうま  
 つらめとはゞきみにも聞え給ひふけれとさ  
 にさやうのよつきたるさまおもひたつへきに  
 もあらぬけしきなれば心なくるしかるへし御すく  
 せにまかせてよにあらんかきりは見たてま  
 つらんのちそあはれにうしろめたけれと世  
 をそむくかたにてもをのつから人わらへにあは  
 つけき事なくてすくし給はなんなとつちなき  
 て御心はせのおもふやうなることをそきこえ  
 給・いづれもいづれもわかすおやり給へと御  
 かたちを見はやくかしうおほしてかくれ給ふ  
 こそこゝろうけれとらみて人しれず見え給

## 4ウ

## 5才

ぬへしやとのそきありき給へたとえてかたそ  
 はをたにえ見たてまつり給はず・うへおはせぬ  
 ほとは かはりてまいりくへきをうつくしくおほし  
 わくる御けしきなればこゝろうつくこそなと聞え

5ウ

みすのまへにみ給へは御いらへなとほのかに  
 聞え給ふ御こゑけはひなとあてにをかしう  
 さまかたちおもひやられてあはれにおほゆる  
 人の御ありさまなりわか御ひめきみたちを  
 ひとにおとらしとおもひおこれとこのきみに  
 えしもまさらずやあらんかゝればこそよの中  
 のひろきうちわつらはしけれたくひあらし  
 とおもふにまさるかたをものつからありぬへかめ  
 り いとゝいふかしくおもひきこえ給・月ころ  
 なにとなくものさはかしきほとに御ことのね

6オ

をたにうけたまはらてひさしうなり侍にけり  
 にしのかたに侍る人はこゝろにいれて侍るさま

まねひとりつ へく おほえ侍らんまかたほに  
 したるにきにくき物のねからなりおなし  
 くは御こゝろとゝめてをしへさせ給へおきな  
 はとりたてゝならふものはへらさりしかとその  
 かみさかりなりしよにあそひ侍しちからにや  
 きゝしるはかりのわかまへはなに事にもいと  
 つきなぐは侍らさりしをうちとけてもあ  
 そはされねとときくうけたまはる御ひはの

6ウ

ねなんむかしおほえ侍る 六条院の御つたへにて  
 右のおとゝなんこのころよにのこり給へる源  
 中納言兵部卿のみやなに事にもむかしの入  
 におとるましういとちきりことにものし給ふ  
 人くにてあそひのかたはとりわきてこゝろ  
 とゝめ給へるをてつかひすこしなよひたる  
 はちをととなんおとゝにはをよひたまはず  
 とおもふ給ふるをこの御ことのねこそいとよく  
 おほえ給へれひはをしてしつやかなるを世に

するものなるにちうさすほとはちをとのさま

かはりてなまめかしうきこえたるなん女の

御事にて中／＼をかしかりけるいてあそはさん

や御ことまいれとの給ふ女房などはかくれたて

まつるもおさ／＼なしいとわかき上らうたつか

見えたてまつらしとおもふはしもこゝろにまかせ

てゐたればさぶらぶ人さへかくもてなすかやす

からぬとはらたち給ふ・わかきみつちへまいら

んととのゐすかたにてまいり給へるわざとつる

はしきみつらよりもいとをかしくいみじ原くくちう

つくしとおほしたり・れいけいてんに御ことつけ

聞え給ふゆつりきこえて今夜もえまいる

ましくなやましくなときこえよとの給ひて

ふえすこしつかうまつれともすれば御前の御

あそひにめし出らるゝかたはらいたしやまたいと

わかきふえをと打ゑみてそつてうぶかせ給ふ

7才

7ウ

いとをかしうふい給へはけしうはあらずなり行

はこのわたりにてをのつからものにあはするけなり

なをかきあはせ給へとせめきこえ給へはくるし

とおほしたるけしきながらつまひきにいと

よくあはせてたゝすこしかきならひ給

かはふえぶつゝかになれたるこゑしてこのひん

かしのつまにのきちかきこうはいのいとおもし

ろくにほひたるを見給ひておまへの花こゝ

ろはへありて見ゆめり兵部卿のみやうちにおはす

なりひとえたおりてまいれしる人そしるとて

あはれひかるけんしといはゆる御さかりの大將な

とにおはせしころわらはにてかやうにてましらひ

なれきこえしこそよとゝもにこひしう侍れ

このみやたちを世人もいとに思ひきこえ

けに人にめてられんととり給へる御ありさまな

れとはしかはしにもおほえたまはぬはなをたくひ

8才

8ウ

あらしとおもひ聞えし心のなしにやありけ  
 んおほかたにておもひ出たてまつるにむねあく  
 よなくかなしきをけちかき人のをくれたて  
 まつりていきめくらうはおほるけのいのちなか  
 さならしかしとこそおほえ侍れなと聞えて出  
 給ひてものあはれにすくおもひめくらしし  
 ほれ給ふついで。しのひかたきにや花。おらせて  
 いそきまいらせ給・いかゝおはせんむかしのこひ  
 しき御かた見にはこの宮はかりこそほとけ

のかくれ給ひにけん御なこりにはあなんかひかり  
 はなちけんをふたゝひいて給へるかとうたかふ  
 さかしきひしりのありけるをやみにまどふは  
 るけところにきこえをかさんかして

心ありてかせのにほはすそのゝむめにまつ  
 うくひすのとはすやあるへきとくれなぬのかみ  
 にわかやまかきてこのきみのふところかみに  
 とりませをしたゝみていたして給ふをおさ

9  
才

なき心にいとなれきこえまほしとおもへは  
 いそきまいら給ひぬ中宮のうへの御つほね

より御とのゐ所にいてたまふほとなり殿上  
 人あまた御をくりにまいる中に見つけ給ひ

てきのふはなといとくはまかてにしいつまいり  
 つるそなどの給ふとくまかりいて侍。しくやしき  
 にまたうちにおはしますと人の申つれはいそ

きまいりつるやおさなげなるものからなれ聞ゆ  
 打なゆひて心やすきところにもとき／＼は

あそへかしわかき人ともそのは。となくあつまる  
 ところそとの給ふこのきみめしはなちて  
 かたらひ給へは人々はちかぢもまいらすまかて

なとしてしめやかになりぬれば春宮にいとま  
 すしゆるされ。ためりないとしけうお。ほしまと  
 はすめりしをときとられて人わるかめりと  
 の給へはまつはさせ給へりしこそくるしかりしか

9  
才10  
才

おまへにはしもときこえさしてゐたれば・我をは  
 人けなしとおもひはなれたるとなことはり也  
 されとやすからすこそ・ふるめかしきおなしすち  
 にてひんかしときこゆなるはあひおもひ  
 給ひてんやとしのひてかたらひ聞え などの  
 たまふついでにこの花をたてまつれば

うちゑみてうらみてのぢならましかはとて  
 打もをかす御らんすえたのさま 花ふさ もかも  
 よのつねならずそのにほへるくれなゐのいろ  
 にとられてかなんしろきむめにはおとれると  
 いふめるをいとかしこくとりならへてもさき  
 けるかなとて御心とゝめ給ふ花なればかひあり  
 てもてはやし給・今夜はこのあなめりやかて  
 こなたにをとをしこめつれば春宮にもえ  
 まいらす花もつかしくおもひぬへくかうはし  
 くてけちかくふせ給へるをわかき心ちにはたく

10  
ウ11  
オ

ひなくうれしくなつかしうおもひ聞ゆこの花  
 のあるしはなと春宮にはうつるひ給はさりし・  
 しらす心しらん人になとこそ聞侍しかなど  
 かたりきこゆ・大納言の御心はへはわか方さまに  
 おもふへかめれと聞あはせ給へとおもふ心はことに  
 しみぬればこの返事けさやかにもの給ひやらす  
 つとめてこのきみのまかつるになをさりなる  
 やうにて

はなのかにさそはれぬへき身なりせは風のた  
 よりをすくさましやは・さてなをいまはおきな  
 ともにさかしらせさせてしのひやかにとかへす  
 返すの給ひて・このきみもひんかしのをは  
 やん事なくむつまじうおもひましたり中へ  
 ことかたのひめきみは見え給ひなとしてれいの  
 はらからのさまなれとわらはこゝちにいとおもりか  
 にあらまほしうおはする心はへをかひあるさ  
 まにて見たてまつらばやとおもひありくに春宮

11  
ウ

の御かたのいとはなやかにもてなし給ふにつけて  
おなし事とはおもひなからいとあかすくちおし  
ければこのみやをたにけちかくて見たてまつら

12才

はやとおもひありくにうれしきはなのついで  
なり・これはきのぶの御返なれは見せてまつる  
ねたけにもの給へるかなあまりすぎたる方に  
すゝみ給へるをゆるしきこえずときゝ給ひ

て右の大臣われらが見たてまつるにはいと物  
まめやかに御こゝろおさめ給ふこそをかしけれ  
あたとせんにたらひ給へる御さまをしめて  
まめたちたまはんも見どころすくなくやな  
らましなとしりうごちてけふもまいらせ給ふ  
に又

12才

もとつかのにほへるきみかそてふれは  
花もえならぬなをやちらさんとすき〜し  
やあなかしこと・まめやかにきこえたまへり・

まことにいひなさんとおもふところあるに  
やとさすかに御こゝろときめきしたま  
ひて

はなのかをにほはずやとにとめゆかはいるに

めつとや人のとかめんとなをこゝろとけす  
いらへたまへるをこゝろやましとおもひぬ  
たまへり・きたのかたまかてたまひてうちわ

13才

たりの事の給ふついでにわかきみのひと  
よとのぬしてまかりいてたりしにほひの  
いとをかしかりしを人はなをとおもひしを  
宮のいともほしよりに兵部卿のみやにちか  
つききこえにけりむへわれをきはずさめたり  
とけしきとりえんしたまへひしこそをかし  
かりしかこゝに御せうそやありしさも見え  
さりしをとの給へは・さかしむめのはなめて給ふ  
きみなれはあなたのつまのこうはいいとさ  
かりに見えしをたゝならておりてたてまつれ



たりしなりうつりかはけにこそこゝろことな  
 れはなましらひしたまはんをんなとはさ  
 はえしゆめぬかな源中納言はかうさまにこの  
 ましうはあゆてたぎにほはさて人かぢこそ  
 よになけれあやしうさきの世のちぎり世  
 いかなりけるむくひにかとゆかしき事に  
 こそあれおなしはなのなゝれとむめはおひ  
 いてけんねこそあはれなれこのみやなどの  
 めてたまふさることそかしなとはなによそへ  
 てもまつかけきこえたまふ・みやの御かたは  
 ものおほししるほとにねひまさりたまへ  
 れはなに事も見しりきととめたま  
 はぬにはあらねと人に見えよつきたらんあ  
 りさまはさらにとおほしはなれたり世の人  
 もときによるこゝろありてにやさしむかひ  
 たる御かたゝにはこゝろをつくしきこえわひ

13  
ウ14  
オ

いまめかしき事おほかれとこなたはよる  
 つにつけものしめやかにひきいり給へるを宮  
 は御ふさいのかたにきゝつたへたまひてふ  
 かういかてとおほしなりにけり・わかきみを  
 つねにまつはしよせたまひつゝしのひやかに  
 御ふみあれと大納言のきみぶかくこゝろ  
 かけきこえ給ひて おもひたちでの給ふ  
 事あらはとけしきとりこゝろまつけし  
 たまふを見るにいとおしうひきたかへて  
 かうおもひよるへうもあらぬかたにしもなけ  
 のことのはをつくし給ふかひなける事  
 ときたのかたもおほしのたまふ・はかなき御  
 かへりなともなければまけしの御こゝろ  
 そひておもほしやむへくもあらず・なにかは  
 人の御ありさまなとかはさても見たてまつ  
 らまほしうおひさきをくなどはみえ

14  
ウ15  
オ

させたまふになときたのかたおもほし  
 よるときくあれといいたついろめき  
 たまひてかよひたまふしのひところお  
 ほか八のみやのひめきみにも御ころさし  
 のあさからていとしけうま<sup>か</sup>てありきたまふ  
 たのもしけなき御ころのあたくし  
 さなともいとつゝましければまめやかに  
 おもほしたえたるをかたしけなきはかりに

15  
ウ

しのひてはゞきみそたまさかにさかし  
 らかりきこえ給

16  
才

(夢のつき橋)

山におはしてれいせさせ給やうに経仏

なとくやうせさせたまふ又の日はよかはに

おはしたれば僧都おとろきかしこまりきこ

え給・年ころ御いのりなとつけかたらひ給

けれとことにいとむつまじきことはなかりけ

るをこのたび一品の宮の御心ちのほとに

さふらひ給へるにすぐれたまへるけんものし

給けりと見給てよりこよなうたうとひ給

ていますこしふかきちきりくはへ給てければ

をもくしうおはするとのくかくわざとおはしたる

1才

ことゝもてさはき聞え給ふ御物かたりなとこま

やかにしておはすれば御ゆつけなとまいり給

すこし人々しつまりぬるにをのくわたりに

しり給へるやとりや侍るとゝひ給へはしか侍り

いとことやうなる所になんにかしかはゝなる

くちあま<sup>①</sup>侍を京にはかくしきすみかも侍

らぬうちにかくてこもり侍るあひたは夜

中あかつきにもあひとふらはんと思給へをきて

侍るなと申給・そのわたりにはたゝちかき

ころほひまで人おほくすみ侍けるをいまは

1ウ

いとがすかにこそ成ゆくめれなどの給ていま

すこしちかうぬよりて忍やかにいとうきた

るこゝちものし侍り又たつね聞えんにつけ

てもいかなりけることにかと心得すおほされぬ

へきにかたゝはゝかられ侍れとかの山里に

しるへき人のかくるへて侍るやうにきゝ侍しを

たしかにてこそはいかなるさまにてなと<sup>モ</sup>もら

しきこえめなと思給ふるほとに御てしに成て

いむことなとさつけ給てけりときゝ侍はまこと

かまたとしもわかとおやなともありし人なれば

2オ

こゝにうしなひたるやうにかことかくる人なん  
侍るをなどの給僧都されはよたゝ人と

見えさりし人のさまそかしかくまでのたまふは  
かるゝしくはおほされさりける人にこそあめれと

おもふにほうしといひなから心もなくたちまち  
にかたちをやつし けることゝむねつづふれてい  
らへ聞えんやう思まはさるたしかにきゝ給へる  
にこそあめれかはかり心得給てうかゝひたつね  
たまはんにかくれあるへきことにもあらず中々  
あらかひかくさんにあひなかるへしなとゝはかり

おもひえて・いかなることにか侍けんこの月ころ  
うちゝにあやしみ思給ふる人の御ことにやとて  
かしこに侍るあまとものはつせに願侍てまつ  
てゝ侍りける道にうちの院といふ所にとゝ  
まりて侍けるにはゝのあまのらうけにはか  
におこりていたくなんわつらふとつげに人の  
まうてきたりしかはまかりむかひたりしにまつ

## 2ウ

あやしきことなんとさゝめきておやのしにかへる  
をはさしをきてもて あつかひなけてなん侍し  
この人もなくなり給へるさまなからさずかに

いきはかよひておはしければむかし物かたりに  
たまとのにをきたりけん人のたとひを思

出てさやうなることにやとめつらしかり侍て  
てしはらのなかにけんあるものともをよひよ  
せつゝかはりゝにかちせさせなとなんし侍  
けるなにかしはおしむへきよはひならねと  
はゝのたひの空にてやまひおもきをた

すけて念仏をも心みたれすせせせんと仏  
をねんし奉りおもふ給へしほとにその人  
の有さまくはしくもみ給へすなん侍しことの

心をしはかりおもふ給へるにてんくゝこたまなど  
やうのものゝあさむき出奉りたりけるにや  
となんうけたまはりしたすけて京にあて

## 3オ

## 3ウ

たてまつりてのちも三月はかりはなき人に

てなんものし給けるをなにかしいもうと故

衛門督の北のかたにて侍しかあまになりて

侍るなんひとりもちて侍し女子をつしなひ

てのち月日はおほくへたて侍しかとかな

しひたえすなき思給へ侍るにおなし年

のほとゝみゆる人のかくかたचितとうるはしく

きよらなるをみ出奉りて観音のたまへると

よろこひ思てこの人いたつらになし奉らしと

まとひいられてなくゝいみしきことゝもを申

されしかはのちになんかのさかもとにみつからあり

侍てこしんなどつかぶまつりしにやうゝいき

いてゝ人と成給へりけれとなをこのらうし

たりけるものゝ身にはなれぬ心ちなんするこの

あしきものゝさまたけをのかれてのちの世を

おもはんとかなしけにの給ことゝもの侍しかは

ほうしにてはすゝめも申へきことにこそは

## 4才

とてまことにすけせしめたてまつりてしに

侍るさらにしろしめすへきことゝはいかてかは空

にさとり侍らんめつらしきことのさまにもあ

るを世かたりにもし侍ぬへかりしかと聞え有て

わつらはしかるへきことにもこそとこの老人と

ものとかく申てこの用ころをとなくて侍

つるになんと申給へは・さてこそあなれとほ

のきゝてかくまでもとひ出給へることなれと

むけになき人と思はてにし人をさはまこと

にあるにこそはとおほすほと夢の心ちして

あさましければつゝみもあへす涙くまれたまひ

ぬるを僧都のはつかしけなるにかくまてみ

ゆへきことかはとおもひかへしてつれなくもて

なし給へとかくおほしけることをこの世には

なき人とおなじやうになしたることゝあやまちし

たることちしてつみふかければあしきものに

## 5才

## 4ウ

らうせられ給けんもさるへきさきの世のち  
きりなりおもふにたかき家のこにこそ物し

給けめいかなるあやまりにてかくまてはふれ給  
けんにかとひ申給へは・なまわかんとをりなと

5ウ

いふへきすちにや有けんこゝにももとよりわざと  
思しことにも侍らず物はかなくてみつつけそめて

侍しかと又いとかくまておちあふるへきゝとは  
おもふ給へさりしをめぐらかにあともなくきえう

せにしかは身をなけたるにやなとさまくゝに  
うたかひおほくてたしかなることはえきゝ侍ら

さりつるになんつみかるめて物すなれはいと心  
やすくなんみつからはおもふ給へ成ぬるをはゝなる

人なんいみしくこひかなしふなるをかくなんきゝ  
出たるとつけしらせまほしく侍れと月ころかく

6オ

させ給けるほいたかふやうに物さはかしくや侍らん  
をやこの中の思たえすかなしひにたへてとふ

らひものしなとし侍なんかしなとの給てさて

いとひんなきしるへとはおほすともかのさかもと  
におり給へかはかりきゝてなのめに思すくす

へくはおもひ侍らさりし人なるをゆめのやうな  
ることゝもゝいまたにかたりあはせんとなん思給ふると

の給けしきいと哀とおもふ給へれば・かたちをかへ  
世をそむきにきと覺えたれとかみひけをそり

たるほつしたにあやしき心はうせぬもあゝりまし  
て女の御身はいかゝあらんいとおしうつみえぬへ

きわさにもあるへきかなとあちきなく心みたれぬ  
まかりおりんことけふあすはさはり侍り月た

ちてのほとに御せうそこを申させ侍らんと申給・  
いと心もとなけれとなをくゝとちつけにいられんも

さまあしければさらはとて帰給ふかの御せうとのわ  
らは御ともにあておはしたりけりことはらからと

もよりはかたちもきよけなるをよひ出給てこれ  
なんその人のちかきゆかりなるをこれがかつく

6ウ

ものせん御文一くたり給へその人とはなくてたゝ

7才

尋きこゆる人なんあるとはかりの心をしらせ給

へとの給へは・なにかしこのしるへにてかならずつみ

え侍なんことの有さまはくはしくとり申ついま

はたゝ御みつからたちよらせ給てあるへからんことは

ものせさせ給はんになにのとかゝ侍らんと申給へは・

うちわらひ給てつみえぬへきしるへと思なし

給ふらんこそはつかしけれこゝにはそくのかたち

ていまゝてすすすなんいとあやしきいはけなかり

しよりおもふ心さしふかく侍を三奈宮の心ほそけ

にてたのもしけなき身ひとつをよすかにおほし

7才

たるかさりかたきほたしに覚え侍てかゝつら

ひ侍つるほどにをのつからくらゐなといふこと

もたかく成身のをきても心になひかたゝ

なとして思なからすき侍にはまたえさらぬ

こともかすのみそひつゝ、すくせとおほやけわた

くしにのかれかたきまゝにつけてこそさま侍らめ

さらては仏のせいし給かたのことをわつが

にもきゝをよはんことはいかてあやましとつゝしみ

て心のうちほひしりにおとり侍らぬものを

ましていとほかなきことにつけてしもおももき

8才

つみうへきことはなとてかおもふ給へんさらにある

ましきことに侍りうたかひおほすましたゝいと

おしきおやの思などをきゝあきらめ侍らん

はかりなんうれしく心やすかるへきなと昔より

ふかゝりしかたのこゝろはへをかたり給・僧都も

けにとつなつきていとゝたうときことなと聞え

給ふほどに日も暮ぬれは中やとりもいとよか

りぬへけれとつのは空にて物したらんこそ猶

ひんなかるへけれとおもひわつらひてかへり給ふに

このせうとのわらはをそつづめとめてほめ

8才

たまふこれにつけてまつほめかし給へと聞え

給へは文かきてとらせ給ふ時々は山におはして  
 あそひ給へよすゝるなるやつにおほすましき  
 ゆへも有けりとうちかたらひ給ふこのこは心も  
 えねと文とりて御ともにいづかかもとになれば御  
 せんの人々すこしたちあかれて忍やかにをなと  
 の給・小野にはいとぶかくしけりたるあをほの  
 山にむかひてまきることなくやり水のほたる  
 はかりをむかしおほゆるなくさめにてなかもめ給  
 へるにれいのはるかにみやらるゝたにの軒

はよりさき心ことにをひていとおほうともした  
 る火のゝとかならぬひかりをみるとてあま君  
 たちもはしに出ぬたりたかおはするにかあらん  
 御せんなどいとおほくこそみゆれひるあなたに  
 ひきほし奉れたりつる返事に大将殿お  
 はしまして御あるしのことにはかにするをいと  
 よきおりとこそ有つれ大将殿とはこの女二宮  
 の御おとこにやおはしつらんなどいふもいとこの

9  
才

世とをくみ中ひにたりやまことにさにやあらん  
 時々かゝる山ちわけおはせしときいとしるかりし  
 随身の声もうちつけにましりて聞ゆ月

9  
才

日のすきゆくまゝにむかしのこののかく思わすれ  
 ぬもいまはなにゝすへきことそと心うければあみた  
 仏におもひまきはしていとゝものもいはてあ  
 たりよかはにかよふ人のみなんこのわたりにはち  
 かきたより也ける・かの殿はこのこをやかてやら  
 んとおほしけれと人めおほくてひんなければ殿  
 にかへり給て又の曰ことさらにそいたしたて給ふ  
 むつましくおほす人のことゝしからぬ二三人はみづをく  
 りにて昔もつねにつかはしゝすいしんそへ給へり  
 人きかぬまによひよせ給てあこかうせにしいも  
 うとのかははおほゆやいまは世になき人とおもひ  
 はてにしをいとたしかにこそ物し給なれうとき  
 人にはきかせしとおもふをいきてたつねよはゝに

10  
才



いまたしきにいふな中々おとろきさはかんほどに  
 するましき人も知なんそのおやの御思のいと  
 おしさにこそかくもたつぬれとまたきにいとくち  
 かため給をおさなき心ちにもはらからはおほかれ  
 とこの君のかたちをはにる物なしとおもひし  
 たりしにうせ給にけりときよていとかなしと

おもひわたるにかくの給へはうれしきにも  
 涙のおつるをはつかしと思てをよとあらよ  
 かにきこえぬたり・かしこにはまたつとめて  
 そうつこの御もとよりよへ大將殿の御使にて

こきみやまうて給へりしことの心うけたまは  
 りしにあちきなくかへりておくし侍てなんと  
 ひめ君に聞え給へみつからきこえさすへき  
 こともおほかれとけふあすよくしてさふらふへし  
 とかき給へりこれはなにこそとあま君おとろ  
 きてこなたへもてわたりてみせ奉りたまへは

10  
ウ11  
オ

おもてうちあかめてものよきこえのあるにやと  
 くるしうものかくしよけるとうらみられんを思  
 つよくるにいらへんかたなくてぬ給へるになをの  
 たまはせよ心うくおほしへたつることよみし  
 くうらみてことの心をしらねはあはたよしき  
 まで思たるほとに山より僧都の御せうそ  
 こにて参たる人なんあるといひいれたりあ  
 やしけれとこれこそはさはたしかなる御せう  
 そこならめとてこなたにといはせられたはいと  
 きよけにしなやかなるわらはのえならず

さうそきたるそあゆみきたるわらうたさし  
 出たれはずたれのもとについぬてかやうにては  
 さふらふましくこそは僧都のは給しかといへ  
 はあま君そいらへなとし給ふ文とりいれてみ  
 れは・入道の姫君の御かたに山よりとて名  
 かき給へりあらしなとあらかふへきやうもなし  
 いとはしたなく覚えていよよひきいられて

11  
ウ

人にかほもみあはせずつねにほこりかならず  
物し給ふ人かなれといつたて心うしなといひ  
てそうつの御文みれば・けさこゝに大将殿

の物し給て御有さまたつねとひ給ふにはしめ  
よりありしやうくはしく聞え侍ぬ御心さしふか  
かりける御中をそむき給てあやしき山かつ

のなかに出家し給へることかへりては仏のせ

めそふへきことなるをなんうけたまはりおと  
ろき侍るいかゝはせんもとの御ちぎりあやまち

給はてあいしふのつみをはるかしきこえ給て

一日の出家のくとくははかりなきものなれば

なをたのませ給へとなんことゝにはみつから

さふらひて申侍らんかつゝ此こきみ聞え

給てんとかきたり・まかふへくもあらずかきあきら

め給へれとこと人は心もえすこの君はたれにか

おはすらんなをいと心うしいまさへかくあなかに

12才

12才

へたてさせ給ふとせめられてすこしとさまに

むきてみ給へはこのこはいまはと世をおもひ

成したくれにもいとこひしと思し人也けり

おなし所にてみしほとはいとさかなくあやに

くにをこりてにくかりしかとはゝのいとかなしく

してうちにも時々ゐておはせしかはすこし

およすけしまゝにかたみにおもへりしわらはこゝ

ろを思いつるにもゆめのやうなりまつ母の

ありさまいとゝはまほしくこと人々のうへは

をのつからやうゝきけとおやのおはすらん

やうはほのかにもえきかすかしとなかゝ

これを見るにいとかなしくてほろゝとなかれ

ぬ・いとおしけにてすこしうちおほえ給へる

こゝちもすれば御はらからにこそおはすめれ

きこえまほしくおほすこともあらんうちに

いれたてまつらんといふをなにかいまは世にある

物ともおもはさらんにあやしきさまにおもかは

13才

りしてふと見えんもはつかしとおもへとはかり  
 ためらひて・けにへたてありともおほしなすらん  
 かくるしさにものもいはれてなんあさましかり  
 けんありさまはめつらかなることゝ見たまひて  
 けんをさてうつし心もうせたましぬなどいふらん  
 物もあらぬさまに成にけるにやあらんいかにもく  
 すきにしかたのことをわれながらさらにえ思  
 いてぬにきのかみとがありし人の世の物かたり  
 すめりしなかなんみしあたりのことにやとほ  
 のかにおもひいてらるゝことあることゝちせしそ  
 のちとさまかうさまに思つゝくれとさらに  
 はか／＼しくもおほえぬにたゝ一人<sup>ヒト</sup>ものし給し  
 人のいかでとをろかならすおもひためりしを  
 またや世におはすらんとそれはかりなん心に  
 はなれすかなしきあり／＼侍るにけふみれば此  
 わらはのかほはちいさくてみし心ちするにいと

13  
ウ14  
オ

忍ひかたけれといまさらにかゝる人にもありと  
 はしられてやみなんとなん思侍るかの人もし  
 世に物したまはゝそれひとりになんたいめん  
 せまほしく思侍るこの僧都のゝ給へる人  
 などにはさらにしら奉らしとこそ思侍れかま  
 へてひかことなりけりときこえなしててもて  
 かくし給へとの給へは・いときたいことかな僧都の  
 御心はひしりといふなかにもあまりくまなく物  
 し給へはまさにのこいては聞え給てんや後に  
 かくれあらしなめにかろ／＼しき御ほとにもおは  
 しまさすなといひさはきてよにしらす心つよ  
 くおはしますこそなとみないひあはせてもや  
 のきはにき丁たてゝいれたり・このこもさは  
 きゝつれとおさなければふといひやらんもつゝ  
 ましけれと又侍る御文いかでか奉らん僧都  
 の御しるへはたしかなるをかくおほつかなく侍

14  
ウ15  
オ

こそとふしめていへはそゝやあなうつくし  
 なといひて御文御覽すへき人はこゝに物  
 せさせ給めりけそこの人なんいかなることに  
 かと心得かたく侍をなをの給はせよおさな  
 き御ほとなれとかゝる御しるへにたのみきこえ  
 給やうもあらんなといへと・おほしへたてゝおほ  
 おほしくもてなさせ給ふにはなにことをか聞  
 え侍らんうとくおほし成にければきこゆへき  
 ことも侍らすたゝ此御文を人つてならてたて  
 まつれとて侍つるいかて奉らんといへはいとことは  
 りなりなをいとかくうたてなおはせそさすか  
 にむくつけき御心にこそと聞えうこかして  
 き丁のもとにをしよせたてまつりたればあれ  
 にもあらてぬ給へるけはひこと人にはにぬ  
 心ちすればそこもとによりて奉りつ御返とく  
 たまはりて参なんとかくうとゝしきをこゝろ  
 うしと思ていそく・あま君御ふみひきときて

15  
ウ

みせたてまつるありしなからの御手にてかみの  
 かなとれいのよつかぬましてしんだりほのかに  
 みて例の物めてのさしすきいとありか  
 たくおかしとおもふへし・さらにきこえんかたな  
 くさまゝにつみおもき御心をはそうつに思  
 ゆるし聞えていまはいかてあさましかりし世の  
 夢かたりをたにといそかるゝ心のわれなからもと  
 かしきになんまして人めはいかにとかきもやり  
 たまはず  
 法の師とたつぬる道をしるへにておもは  
 ぬ山にふみまとぶかなこの人はみやわすれ給  
 ぬらんこゝにはゆくゑなき御かたみにみるものにて  
 なんなといとこまやか也かくつふゝとかき  
 給へるさまのまきはさんかたなきにざりとて  
 その人にもあらぬさまを思のほかにみつけれ  
 れ聞えたらんほとのはしたなきなをを思みたれ

16  
才16  
ウ

ていとゝはれ／＼しからぬ心はいひやるへきかた  
もなしさすかにうちなきてひれふしたまへれば  
いとよつかぬ御有さまかなとみわつらひぬいかゝ聞  
えんたとせめられて心ちのかきみたるやうにし  
侍ほとためらひていまきこえんむかしのこと

おもひいつれとさらにおほゆることもなくあやしう

いかなりける夢にかとのみ心もえすなんすこし  
しつまりてやこの御文なども見しらるゝことも

あらんけふはなをもて参給ね所たかへにも

あらんにいとかたはらいたかるへしとてひるけな

からあま君にさしやり給へればいとみくるしき

御ことかなあまりけしからぬは見奉る人もつ

みさりところなかるへしなといひさはくもつた

てきゝにくゝおほゆればかほもひぎいれてふし

給へり・あるしそこの君に物かたりすこし聞え

てものゝけにやおはすらん例のさまに見え給ふ

17才

17ウ

おりなくなやみわたり給て御かたちもことに  
なり給へるを尋聞え給ふ人あらはいとわつら  
はしかるへきことゝみたてまつりなけきはへしも  
しるくかくいとあはれに心くるしき御ことゝもの  
侍けるをいまなんいとかたしけなく思侍る日比

もうちへなやませ給ふめるをいとゝかゝることゝも  
におほしみたるゝにやつねより物覚えさせ

たまはぬさまにてなんとときこゆ・所<sup>に</sup>つけておかしき  
あるしなとしたれとおさなき心ちはそこはかと

なくあはてたる心ちしてわざと奉れさせ

給へるしるしになにことをかはきこえさせんと

すらんたゝ一ことを給はせよかしなといへはけ

になといひてかくなんとつつしかたれとも物ものた

まはねはかひなくてたゝかくおほつかなき御有

さまを聞えさせ給ふへきなめり雲のはるが

にへたゝらぬほとにもはへめるを山風<sup>ふかぐ</sup>ぶくとも

又もかならずたちよらせ給なんかしといへはすゝ

18才

るにぬくらさんもあやしかるへければかへりな  
んとす人しれすゆかしき御有さまをもえみす

18  
ウ

なりぬるをおほつがなくちおしくて心ゆか  
すなからまいりぬいつしかとまちおはするに  
かくたとくしくて帰きたれはすさましく中々  
なりとおほすことさまくにて人のかくし  
すへたるにやあらんと我御心のおもひよらぬ  
くまなくおとしをぎ給へりしならひにとぞ  
本にはへめる<sup>1</sup>

19  
才

注

- (1) 「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録 源氏物語秘訣」、『文学部紀要』第四七卷二号（中京大学文学部 平成二五年三月）
  - (2) 「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆 桐壺」、『文学部紀要』第四八卷一号（中京大学文学部 平成二五年一〇月）
  - (3) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆 帚木」、『文学部紀要』第四八卷二号（中京大学文学部 平成二六年三月）
  - (4) 「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆 蓬生 手習 玄陳筆 閑屋」、『文学部紀要』第五一卷二号（中京大学文学部 平成二九年三月）
  - (5) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄的筆 空蟬 岡本主水筆 夕顔」、『文学部紀要』第四九卷一号（中京大学文学部 平成二六年一〇月）
  - (6) 注5に同じ。
  - (7) 「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆 若紫 石井了俱筆 末摘花 左馬助筆 花宴」、『文学部紀要』第四九卷二号（中京大学文学部 平成二七年三月）
  - (8) 「長谷川端蔵『源氏物語』東寺觀智院筆 葵 岡本主水筆 賢木 北左平次行生筆 花散里」、『文学部紀要』第五〇卷一号（中京大学文学部 平成二七年一〇月）
  - (9) 「長谷川端蔵『源氏物語』大鳥居信岩筆 須磨 岡本主水筆 明石 澁標」、『文学部紀要』第五〇卷二号（中京大学文学部 平成二八年三月）
  - (10) 注9に同じ。
  - (11) 注4に同じ。
- (12) 「長谷川端蔵『源氏物語』宗琢筆 絵合 玄仍息女筆 松風 岡本主水筆 薄雲 伴与九郎紀金筆 朝顔」、『文学部紀要』第五一卷一号（中京大学文学部 平成二九年一月）

- (13) 「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆 少女 玉鬘 昌倪筆 初音 八幡田中殿筆 胡蝶」『文学部紀要』第五二巻二号  
 (中京大学文学部 平成三〇年三月)
- (14) 注13に同じ。
- (15) 「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆 橋姫」『文学部紀要』第五一巻一号(中京大学文学部 平成二八年二月)
- (16) 注4に同じ。
- (17) 注7に同じ。
- (18) 「長谷川端蔵『源氏物語』宗貞筆 蛭 石井了俱筆 常夏 北畠殿筆 篝火 能舜筆 野分 水無瀬中将殿筆 藤袴」  
 『文学部紀要』第五三巻一号(中京大学文学部 平成三〇年二月)
- (19) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 紅葉賀」『文学部紀要』第四六巻二号(中京大学文学部 平成二四年三月)
- (20) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 宿木」『文学部紀要』第四七巻一号(中京大学文学部 平成二四年一〇月)
- (21) 注7に同じ。
- (22) 注8に同じ。
- (23) 注8に同じ。
- (24) 注9に同じ。
- (25) 注12に同じ。
- (26) 注12に同じ。
- (27) 注12に同じ。
- (28) 注13に同じ。
- (29) 注13に同じ。
- (30) 注18に同じ。



- (31) 注18に同じ。
- (32) 注18に同じ。
- (33) 注18に同じ。
- (34) 正宗敦夫氏編『顯伝明名録』上 日本古典全集(日本古典全集刊行会 昭和十三年一月)
- (35) 時慶記研究会翻刻・校訂『時慶記』第二卷(臨川書店 平成一七年三月)
- (36) 福井久蔵氏『連歌の史的研究』(有精堂 昭和四四年一月)「第四十二 北野社坊の連衆」。
- (37) 『隔婁記』研究会編『隔婁記』総索引(思文閣出版 平成一八年七月)
- (38) 北野神社社務所編『北野誌』首巻 天(国学院大学出版部 明治四二年二月)「曼殊院及社家」参考。
- (39) 連歌総目録編纂会編『連歌総目録』(明治書院 平成九年四月)
- (40) 伊井春樹氏編『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版 平成一三年九月)参考。
- (41) 赤松俊秀氏編『隔婁記』第一(鹿苑寺 昭和三三年一月)「思文閣出版 平成九年三月復刻」
- (42) 注41に同じ。
- (43) 『隔婁記』に見える能円の源氏講義の年月日を掲げる。巻名の記載のある場合はそれも記した。
- 寛永十四年(一六三七) 九月一日・一〇月一四日。
- 十五年(一六三八) 七月二六日・八月六日。
- 十六年(一六三九) 三月二〇日・四月一日・五月二日・八月一四日。
- 十七年(一六四〇) 三月六日・六月二〇日・七月三日「若紫」。
- 十八年(一六四一) 正月九日「初音」・二月一四日・二月三日「未摘花」・四月二四日「紅葉賀」・九月一五日「花宴」「葵」。
- 十九年(一六四二) 正月一〇日「葵」・二月二九日「葵」・四月五日「賢木」・六月二四日「賢木」・七月二九日「

八月三日「賢木」、九月三日「桐壺」。

正保 元年（二六四四）正月一九日「花散里」から「須磨」。

正保 二年（二六四五）八月三日「須磨」。

慶安 元年（二六四八）七月二十四日「須磨」。

承応 元年（二六五二）正月二十七日「明石」。

明暦 二年（二六五六）閏四月一日「桐壺」。

(44) 亀井伸明氏校訂『見聞談叢』岩波文庫（岩波書店 昭和十五年七月）

(45) 庄村貞甫・河喜多真彦編『紀年大成』（弘所書林 嘉永七年）

(46) 川喜多真一郎編『古今書画増補鑒定便覧』上（欽英堂・明昇堂 明治三〇年）

(47) 正宗敦夫氏編『顯伝明名録』下 日本古典全集（日本古典全集刊行会 昭和十三年二月）

(48) 寺田貞次氏『京都名家墳墓録』（山本文華堂 大正十一年一〇月）

(49) 石田一良氏『伊藤仁斎』人物叢書（吉川弘文館 昭和三五年一月）「第一幼少時代」。

加藤仁平氏『伊藤仁斎の学問と教育』（第一書房 昭和五四年三月）「伊藤家累代の賢母良妻」。

市古貞次氏他編『国書人名辞典』第二卷（岩波書店 平成七年五月）「玄仲」。

加藤楸邨氏他監修『俳文学大辞典』（角川書店 平成七年一〇月）「玄仲」。

浅沼アサ子氏『伊藤仁斎の女子教育論に関する考察』東京家政学院大学紀要 第三七号（平成九年）

広木一人氏編『連歌辞典』（東京堂出版 平成二二年三月）

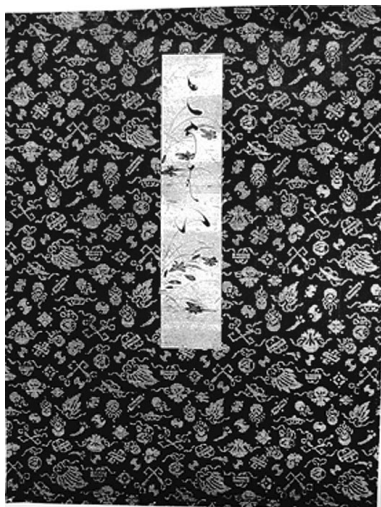
長坂成行氏『篠屋宗禰とその周縁』（及古書院 平成二九年二月）「七 玄仲に『源氏物語』松風の書写を依頼」。

(50) 注36と同書「第三十九 徳川幕府の御連歌師」。

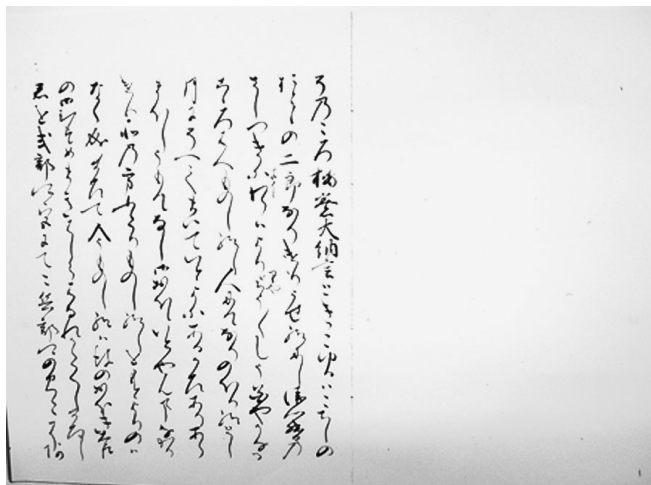
(51) 時慶記研究会翻刻・校訂『時慶記』第三卷（臨川書店 平成二〇年七月）

- (52) 注(49)の長坂氏の著書。
- (53) 大津有一氏『増訂版 伊勢物語古註釈の研究』(八木書店 昭和六一年一月)「補遺篇 三二、玄仲抄」。
- (54) 代表 田中弘清氏『石清水八幡宮史』首巻(統群書類従完成会 昭和一四年八月・第二刷 平成九年七月)
- (55) 注47に同じ。
- (56) 注51に同じ。
- (57) 辻善之助氏編『鹿苑日録』第五巻(大洋社 昭和一二年八月)
- (58) 中村幸彦氏編著『策伝和尚送答控』未刊文芸資料第三期(古典文庫 昭和一九年一月)
- (59) 鈴木棠三氏『安楽庵策伝ノート』(昭和四八年九月 東京堂出版)
- (60) 京都府立総合資料館蔵『時慶卿記』デジタル版。
- (61) 注57に同じ。
- (62) 注34に同じ。
- (63) 本田慧子氏・武部敏夫氏校訂『泰重卿記』第三(統群書類従完成会 平成一六年六月)
- (64) 堀口悟氏『江戸時代初期の香文化』『茨城キリスト教大学紀要』五〇号(平成一八年)
- (65) 注36に同じ。
- (66) 時慶記研究会翻刻・校訂『時慶記』第四巻(臨川書店 平成一五年四月)
- (67) 広木一人氏編『連歌辞典』(東京堂出版 平成二三年三月)
- (68) 東京大学史料編纂所編『大日本史料』第一〇編之六(東京大学出版会 昭和四五年三月)
- (69) 東京大学史料編纂所編『史料綜覧』巻一〇(東京大学出版会 昭和一三年九月・昭和五二年一〇月 覆刻)  
注34に同じ。
- (70) 上田正昭氏他監修『日本人名大辞典』(講談社 平成一三年二月)「日収」の項。

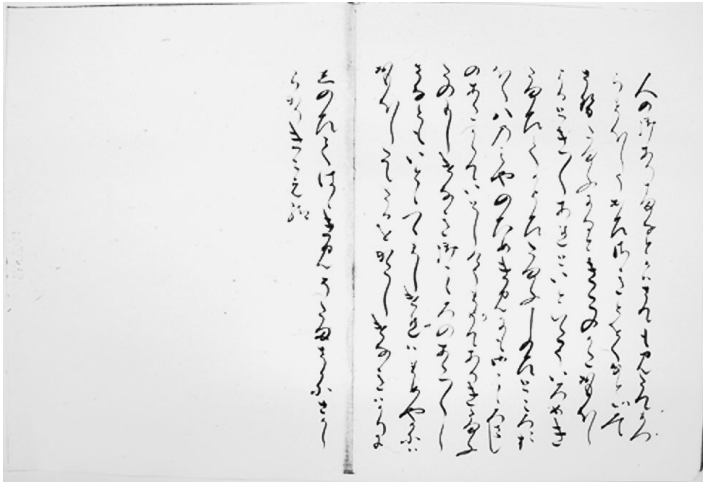
- (71) 山岸徳平氏・今井源衛氏監修『宮内庁書陵部蔵 青表紙本 源氏物語』（新典社 昭和四三年二月〜四五年八月）
- (72) 武部敏夫氏・川田貞夫氏・本田慧子氏校訂『泰重卿記』第二（続群書類従完成会 平成一〇年四月）
- (73) 熊倉功夫氏『後水尾天皇』中公文庫（中央公論新社 平成二二年一月）、「4 寛永のサロン」。
- 冷泉為人氏監修『寛永文化のネットワーク』（思文閣出版 平成一〇年三月）
- (74) 注41に同じ。
- (75) 京都市『京都の歴史』五（学芸書林 昭和四七年四月）「第3章 寛永の文化」に、  
後水尾天皇を中心とするこの時期の天皇や皇室と田緒をもち、あるいは御願寺、勅願寺となり、皇室の援助により開創され、復興された寺院は、今日の想像をこえて多かつた。
- また、その一つとして「禁裏内道場の般舟三昧院」を掲げる。「般舟三昧院」は般舟院である。
- また、国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』一一（吉川弘文館 平成二年九月）「般舟三昧院」には、  
方丈に後水尾院の賛、妙法院の宮薨恕親王の筆になる後水尾院の画像がある。
- と記されている。この『国史大辞典』と下中邦彦氏編『京都市の地名』日本歴史地名大系二七卷（平凡社 昭和四四年九月）によると、般舟院は、伏見に建立されたが、豊臣秀吉の伏見城建設のため、伏見から今出川千本に移転した。現在は、天台宗延暦寺の末寺で、境内は藤原定家の時雨亭の場所ともいわれる。
- (76) 『八代城主・加藤正方の遺産』（八代市立博物館未来の森ミュージアム 平成二四年一〇月）に、写真が掲載されている。



紅梅 表紙



紅梅 1才



紅梅 終丁



夢の浮橋 表紙

山はたうて、れは、まき、か、つ、ゆ、り、の、て、ゆ、り、  
 ひと、と、せ、せ、い、ふ、ふ、入、り、目、ど、は、よ  
 け、い、ん、の、僧、を、た、げ、く、か、い、の、あ、ら、ま、  
 へ、所、半、丁、の、ソ、ウ、ラ、さ、う、け、く、う、み、ゆ、  
 け、れ、こ、し、の、シ、メ、エ、き、ま、は、か、り、け  
 ば、と、く、の、一、口、の、ま、り、の、ち、か、い、ゆ、ま、  
 こ、う、ひ、な、ま、と、く、た、ま、さ、り、け、ん、の、け、  
 伶、り、の、見、ゆ、め、り、ま、か、た、り、い、は、け、  
 て、い、ま、こ、う、ま、ら、り、け、ゆ、る、は、は、  
 を、し、し、た、り、ま、ら、り、く、ま、ら、り、い、は、け

夢の浮橋 1才

ふく、ま、け、て、い、ま、の、う、り、と、ま、ら、り、い、は、け、  
 多、く、あ、ら、ま、の、ま、ら、り、ま、ら、り、ま、ら、り、と  
 とも、い、ん、こ、う、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 い、ま、の、う、り、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ま、け、て、い、ま、の、う、り、ま、ら、り、い、は、け、  
 橋、を、渡、し、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 い、ま、の、う、り、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 入、り、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 入、り、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ん、と、い、ま、の、う、り、ま、ら、り、い、は、け、  
 む、り、い、は、け、ま、ら、り、い、は、け、  
 と、あ、ら、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 く、た、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ち、か、い、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ち、か、い、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ち、か、い、ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、  
 ま、ら、り、い、は、け、ま、ら、り、

夢の浮橋 終丁